

日蓮大聖人御書全集

ときどのごへんじ

土木殿御返事

えちたいざい こと

(依智滞在の事)

新版
1276
〜
1277

ときどのごへんじ

えちたいざい こと

土木殿御返事 (依智滞在の事)

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

ときじょうにん

文永8年(71)

9月15日

50歳

富木常忍

ごへんじ

御返事

にちれん

日蓮

じゅうにちとりのとき

ごかんき

むさいのかみどのおん

預

この十二日酉時、御勘気。

武蔵守殿御あずかりにて、

じゅうさんにちうしのとき

鎌

倉

出

さどのくに

流

そうろう

十三日丑時にかまくらをいでて佐土国へながされ候が、

当時

本間

依智

もう

とうじはほんまのえちと申すところ、えちの

ろくろうざえものじようどの

だいかん

うまのたろう

もう

もの

そうろう

六郎左衛門尉殿の代官・右馬太郎と申す者あずかりて候

しごにち

そうろう

が、いま四・五日はあるべげに候。

おんなげ

そつろひ

いちじよう

もと

御歎きはさることに候えども、これには一定と本より

期

そつら

歎

そつろひ

くび き

ごして候えばなげかず候。いままで頸の切られぬこそ

ほい

そつら

ほけきよう

おん 故

かこ くび

失

本意なく候え。法華経の御ゆえに過去に頸をうしないたら

しょうしん

身

そつろひ

ば、かかる少身のみにて候べきか。

ひんずい

説

たびたびとが

また「しばしば擯出せられん」ととかれて、度々失にあ

じゅうざい

消

ほとけ

そつら

われ

たりて重罪をけしてこそ仏にもなり候わんずれば、我と

くぎよう

致

こころ

苦行をいたすことは心ゆくなり。

くがつじゅうごにち

にちれん

かおう

九月十五日

日蓮

花押

ときどのごへんじ

土木殿御返事

かみ 責

たも

ほけきよう

しん

いろ

上のせめさせ給うにこそ、

法華経を信じたる色もあら

そら

つき

欠

満

潮

干

満

うたが

われ候え。月はかけてみち、しおはひてみつこと疑いな

ばち

かなら

とく

何

歎

し。これも罰あり。必ず徳あるべし。なにしにかなげかん。